新作（タイトル未定）

黒木原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
新作（タイトル未定）

【Ｎコード】
Ｎ０４５６Ｚ

【作者名】
黒木原

【あらすじ】
大学生になった澤崎は、モテる男（リア充）になることを誓う。そこで出会った叫部というサークル。そこで繰り広げられる恋愛模様を描いたモテない男とそれぞれ悩みを抱えた女たちの物語。

1章（前書き）

まだ未完です

1章

誰でも悩みは持っている、持っていなければおかしいのだ。なぜかそう、自分に言い聞かせなければならない気がした。

そうでないとやってられない。

自分だけが悩んでいるなんて思いたくない。

それだけ自己弁護的な回想をしておきながら、それでいてなんで俺はこうも傲慢に、自分の考えを押し付けてしまったのだろうと、それだけを、今はそれだけをひたすらに思う。

人の気持ちなんて他人にはわからない。なんてことはよく言われるけれど、わかってあげようともしないのは何か間違っていると思う。自分に置き換えてみれば簡単だ。誰にも理解なんてできない、そう思っている裏で、理解しようとしてほしい、親身になって考えてほしい、だなんて図々しいことを思っているのだ。

誰かの為に何をしようとか、自分の為に誰かが何かをしてくれるとか、そんなことを一途に素晴らしいと思う。だけど本音ではそれが、目的を持ったものになっているのではないか。

本当に、相手のことなんて考えているのだろうか。

つまりは、全部自分の為に人を道具として扱っている――そんなことを考えてしまう。

最も、普通はそんなに深読みするようなことじゃないんだろうけど、それでも、人との出会いと、人との関わりが、俺にそんなことを考えさせるような起因となったのだ。

それが悪いわけじゃない。むしろ感謝してる。

俺が生まれ変わるのは、自分の力と誰かの力が合わさってこそ、それができるはずだと、十二分に思い知った。

もちろん、その逆も然りなわけだけど。

――――――――　１　差し込んできた光――――――――

イケメンとモテるやつって同意義に思えて実はそうじゃないんだぜ？　と俺の友達は言っていたが、なんでそれを俺に言ったのか、未だに意味がわからない。イケメンでもなく、モテるわけでもない俺になんでそれを言ったのか。なんてことを考えているうちに、とうとう俺も高校という青春最後の船から降ろされてしまった。

つまりは、大学生になってしまったのだ。

いやまあたしかに、就職するやつらに比べたらまだ大学ってのは学生だし、青春の続きみたいなもんだとポジティブに解釈することもできる。

でもな、さすがにきついってもんだぜ。

高校からの友達が全くいないこの俺が、恋愛経験の全くないこの俺が。

いきなり、大学なんていうリア充と非リア充くっきりと線引きされる世界に放り込まれるわけだからな。

とまあそんな具合で、俺の大学生活はスタートした。

実家の神戸から新幹線で約３時間。俺はついにこの大都会、東京に君臨したのであった。　ものの２０秒くらいで標準語をマスターした俺に死角はない。なんて感じで勢いだけは盛りに盛った状態で

大学のキャンパスへと足を踏み入れたわけだが、まあアホ丸出しもいいとこだ。
今日は入学式だってのに、俺だけが私服で来ていたってんだからな。
もちろん私服のまま入学式に出られるはずもなく、式が終わるまで、適当にその辺のベンチで時間を潰していた。
そして入学後の最初のガイダンス。これももちろん、新入生は全員スーツ姿だ。
やっぱり私服姿の俺は出られるはずもなく、教室の外でじっと耳を澄ませていた。重要事項は聞き漏らさないようにだ。
そう、俺はけっこう真面目なのだ。
真面目でありながら、かなりどんくさい。まあ一番ダサいタイプなんだよなこれが。
「新入生ガイダンスってやっぱあれだよな……友達をつくる最初の場になるんだよな……」　それを逃してしまった俺は幸先悪いで済まされるような事態ではない。これからどうすりゃいいってんだよ……。
引っ越してきたばかりの新居に向かう最中、俺はずっとそんなことを考えていた。
都会の喧騒も、サラリーマンの足音も、キャーキャー騒いでいる若者たちも、なんだか気に食わなくてむしゃくしゃする。
最低のスタートだぜ……。
でも俺にだってまだ希望は残されている。新生活の中で、ひとつだけ希望の切れ端が手中にあるのだ。もちろん、何の努力もなしに得ようなんて思ってないさ。
と、俺は今日の失態を全て払拭するべく、母親から預かった地元の土産を持って自分の部屋を出た。
目的地はすぐ隣、そう、美人ＯＬが住んでいる隣の部屋だ。
引っ越してきた日、俺は隣の部屋に美人のＯＬが住んでいるのを目撃した。２５歳くらいでスラっとした体系、黒の長髪で整った顔

立ち。スーツを着ていたわけではないので、ＯＬだという確証はないが、ここだけはやたらポジティブに、俺は彼女を勝手にＯＬだと思い込むことに決めたのだ。
こんにちわ、隣に引っ越してきた澤崎という者です。
うむ、こんな感じでいいだろう。普通が一番だ。
と、心の準備を済ませ、俺は指先に全神経を込める。
ピンポーン！　と思ったより少し大きな音でチャイムが響く。
「……」
留守か……。
まあいい、夜にまた来よう、と俺はそそくさと自室へ戻った。

それから約３０時間ほど経過……。
「いつなら家にいるんだよ美人ＯＬ！」
そうひとりごちながら俺は肩を落とした。まさか、美人ＯＬさんとお近づきになりたい、という下心を読まれてしまったのだろうか。うわーキモいガキしつけーなー。とか思われてないだろうか。
だって５回だぜ？　５回も行って留守ってことあるか？　会社の都合でどっかに泊まってるんだろうか。いやでも土日だし、普通なら休みだよな……。ちくしょー、こうなったら家の前で待ち伏せでも――
「君さ！　ストーカーはよくないよ！」
突然、なんだか可愛らしくとげとげしい声が頭上から響いてきた。おい、これは俺の中の天使の囁きってやつか？　それならもう少し、もう少しだけ俺にストーカーを……じゃなくて、希望を持たせてくれ。
「君聞いてんの？　上だよ上」
「はっ……」
正気に戻った俺の視界に写ったのは、いかにも東京人って感じの小柄で可愛らしい少女の姿だった。

ベランダからこちらを覗く姿は、まあある意味天使と言っても過言ではない。しかしここで言い負かされては大学生のメンツ丸つぶれだ。相手は少女、少し強きでいくのが常識だろう。
「君ストーカーの意味わかってる？　俺はただお隣さんに挨拶しようと思っただけだよ」
多少、自問自答の意味合いも込めて答える。俺は道を踏み外してはいないか、それはたしかな重要事項だ。
「あ、君最近引っ越してきたの？　へぇ……大学に進学したばっかとか？」
「おい！　ストーカーの件についてまず自分が間違っていたと認めろよ！」
年下相手に少し強く言いすぎたかもしれない――と反省しようと思っていたが……。
大爆笑されていたのでやめた。
「何笑ってんだよ！」
「ひぃひぃ……いやだってさ、そんな強く否定するもんだからおもしろくって。わかってますよーんそんなこと。ただあ、ストーカーじゃないにしてもさ、美人ＯＬに自然に近づこうとするあたり……」
「近づこうとするあたりなんだよ」
俺はできる限りの鋭い目つきで少女を睨みつけてやった。どうせ俺にとってプラスになる発言じゃないだろうからな。
「君、モテないでしょ？」
「てっ……てめえそれだけは言ってはーー」
「だって見たらわかりますもん！　全く手入れしてないわけでもないけどお洒落とは言いがたいそのミディアムの中途半端な髪型、超平凡なファッション、無愛想な表情、他人に壁をつくってる感じ。言おうと思えばいくらでもでてきますけども？」
「やめろおおおおおおおおおお！　強靭なメンタルを誇る俺でもさすがにそこまで言われると……、ちっ、もう左足が使いもんになってねーじゃねーか！」

初対面の年下少女に、こうまで悪口を言われるとさすがの俺でも力が抜けてしまうってもんだ。腰が抜けなかっただけ良かったぜ。
「うん、そういうとことか。表面では強い人間気取ってるのかもしれないけどどー考えても心折れるの早そうだもん。泣かせちゃったらごめんね」
正直もう泣いてます、とはもちろん白状できず、俺は無言で佇んだ。
いやたしかに、自覚はあるんだよ全部。だけどこうも面と向かって言われるとやっぱ無理ですわ。ほんと、ただの地獄。だって初対面だぜ？　どんだけ気が強いんだよこいつ。
「もしもさ、あんたが超モテるイケメンだったら事態はどうなってたと思う？」
「はぁ？　考えたくもねーよそんなもん」
「いいから答えろダメ男！」
「いて！　何すんだよ！　言葉の暴力だけでなくとうとう物まで使ってきやがったな！」
少女にベランダからスリッパを投げられ、そして見事後頭部に命中する、なんて出来事を経験しているのはおそらくこの世で俺だけだろう。
「あんたが答えないから悪いんでしょ！　それに言葉の暴力じゃなくて今までのは全部事実じゃん」
「会って数分でそんなに事実全部言い当てられると思ってんのか！　言っとくけどな、たしかに俺はモテねーよ。だけど、高校時代は告られたりもしたんだぞ！」
「出た……、ていうか初めてこんなテンプレモテない人間見た……」
「おい、何ぼそぼそ言ってんだよ」
「いやさ、モテない男って決まってこう言うんだよ。告られたことはあるぜ、って」
左足に続き、右足もが起動不能状態に陥ってしまった。
「いやでもまて！　ほんとに、別に全然モテないってわけじゃない

んだよ。あいつお前のこと好きっぽいぜ、とかわりと言われたりすることあるぞ」
少女は頬杖をつき、目を細めて懇親の一撃をかましてくれた。
「じゃあ彼女できたことあんの？」
右腕と左腕を両方もってかれた。
完全に戦闘不能状態に陥った俺は玄関の前で横になる、という警察を呼ばれても仕方のないような状態になった。
「なんなんだよお前……。恋愛マスターか何かか？」
顔だけなんとか持ち上げて、少女のほうを見てみると、そこには少女っていうか、超傲慢そうに腕をくんだおてんば姫様みたいなやつがいた。
「あたしは夢見（ゆめみ）光（ひかり）。高校時代は恋愛キューピットと恐れられた18歳。大学1年生よ！」
「大学1年生かー。じゃあ俺と一緒だな……って、えええええええええええええええええええええええええ！」
「何よ。どうみても大学1年生っぽいでしょ」
「大学1年生っぽいってなんだよ！　そんな、ぽい、はねーよ！　てかどうやっても中学生くらいにしか見えねーぞ！」
「あんたねえ……」
なんだ？　ブルブルと震えだしたぞ。こいつもしかして、怒って
――
「中学生なんかと一緒にすんじゃねえええええ！」
「中学生に謝れ！」
なんだがわけのわからない大声合戦になってしまった。
「いや間違えた。中学生と一緒にすんじゃねえっていうか中学生って言うなアホ！」
とても幼稚な返しだった。
やっぱ見た目だけじゃないな、中学生なのは。
「よーし、なんとか両足だけは回復したみたいだ。こっからは俺の番だぜ」

指をポキポキ鳴らしたいところだが腕はまだ稼動しないので代わりに首を豪快に鳴らしてやった。さて、反撃開始だ。
「何よ……。何を企んでいやがるわけ？」
「お前、恋愛キューピットと恐れられた、って言ったよな？」
「それがどうかした？」
俺は夢見光が一瞬焦りの表情を浮かべたのを見逃さなかった。
くらえ！　これが俺ののスーパーバズーカだぜ！
「お前、彼氏できたことないだろ」
「ぎゃあああああああああああ！」
「……」
体が拒否反応を起こしたみたいだな。そそくさと家の中に舞い戻っていきやがったぜ。
まああれだな。
完全勝利。
そう決め込んで、俺は復活したばかりの右腕で思いっきりガッツポーズを決めてやった。

翌日、今日から授業が始まる俺の大学生活がどうなるのか、それを決定付ける重要な日が訪れた。
この日にヘマをやらかすわけにはいかない、と気合いを入れ、髪型をいつもより丁寧にセット（まあワックスを通常より多めにつけただけだが）し、自分の頬を2発ほど両手でパチンと鳴らせて準備完了。
何も変わってないじゃないかと言われればそれまでなのだが、何にしても気の持ちようだと思うのだ。
と、それだけ用意周到にしておいてなんだが、玄関を開ける前に妙な寒気が体中を駆け巡った。
おいおい、なんなんだこの悪寒は。
今の完全無欠状態の俺には何の抜かりもないはずだぜ。
そう気合いを入れ直し、元気良く、鼻歌でも歌ってやろうかとい

うノリで玄関を開けた瞬間――
悪寒の原因がそこに立っていた。
「俺が何をしたって言うんだ！」
「何よいきなり。別に怒ってないわよ昨日のことなんて。お互い様だったしね」
そう言って可愛く首を傾げられても、お前はもう俺の中で完全に恐怖の対象なわけなんだが……。
そう、玄関の前に立っていたのは昨日の少女、いや、少女じゃなかったんだが、その夢見光だったのである。
「何か用でもあんのか？　俺はこれから人生を決める旅に出かけるんだ。邪魔をしないでくれたまえ」
「あんた大学から家近い？」
無視をして自分の話を続ける女はたいてい腹黒い、と高校時代のイケメンな友達が言っていたのを思い出した。
まさに、である。
「徒歩２０分だけど、それがどうかしたのか」
「やーっぱり！　あたしもそこ、入学したのよ」
「あの……もうノリ突っ込みする元気とかないんですが……」
折角の気合いが台無しになっちまったよ。こんな妄言しか吐かない女、そりゃあ顔が良くてもモテねーよ。
「いやいや突っ込むところないですから！　あたしとあんた、同じ大学なの！」
ほーほー、同じ大学ね。なるほど――
「断る！」
「黙れ！　いいから登校するよ！　１年生は語学が１限目からあるでしょ！　初日から遅刻とか生意気なことしたらできる友達もできなくなっちゃうよ！」
って、なんかマジっぽいな……。同じ大学で同じアパート、そこだけ抜粋してみれば運命の出会いだとかそんな風に言えなくもなさそうだけどさあ、相手がこいつだとなると、むしろ不幸ですよこれ。

「で、大学がまあ同じだったとしても、なんで俺とお前が一緒に登校しなきゃいけないんだよ。もし周りから彼女だと思われてみろ。モテるもんもモテなくなるだろ」
という懸念はもちろんある。それだけは絶対に犯してはいけないミスだ。
「絶対大丈夫だから安心して。友達できたらあんたなんかそっこう見捨ててやるから」
こええええ。女って生き物はこれだからなー。
てかまあ、そう言われると悲しくなるっていうかいたたまれなくなるっていうか。人間って生き物はさ、ひとつひとつの出会いを大切にするべきだと思うんだ。それが例えどんな妄言勘違い女（しかも見た目は中学生）だとしても。
人には人の価値観ってのがあってだな、いつそれが覆るかわからない。人間の細胞は日々変化しているんだ。もしかしたら俺がこいつのことを素敵な女の子だと認識する日が来るかもしれない。うむ、来ないとは言い切れない。
うーんまあ、簡潔に言うとだな――
「それは断る！」

まあそういうわけで、俺は晴れて、この大都会に来て初の友達をゲットしたわけだ――。　と、そう簡単に行くわけもなく、ツンデレなのかなんなのか知らんが、大学に着くなり、お前とは無関係だ、みたいな顔をしてどこかへ消え去りやがった。
本当につくづく思う。女子ってめんどくさいよな……。
そんなことを考えながらの1限目。
驚くことに、ほとんどのやつが友達と授業を受けているのだ。そりゃあ何人かは一人で寂しそうにしているが、そいつらは決まってモテなさそう。
つまり、ある程度モテ要素があってリア充臭を醸し出してる連中は入学式とガイダンスの際に既に友達を作っていやがるのだ。

薄情だと思わないか？　たった1日。しかも入学式に間違えて私服で行ってしまったというだけで、こうもあっさり人生を破綻されてしまっていいのか？
どうなってんだこの世の中。たった一度のミスでこんなにも差が出ちまうのかよ……。
「おーいそこのお前。何泣き出しそうな顔で俯いてるんだ。そんなに俺の授業がつまらんか」
「そんなことないっす。すいません」
追い討ちをかけられた。
ひどい。ひどすぎる。
てかそもそも、大学では教授と生徒の距離がもっと遠いもんかと思ってたら普通に注意されたりもするんだな……。
あー笑われてるよ、リア充軍団に。
こっちからしてみれば笑い事じゃねーんだよ。頼むから全員爆発してくれ。

続いて2限。
1限みたいな感じかと思っていたらどうやら全くの見当違いだったらしく、今度は生徒の数が一気に増えて、大学らしい形態になっている。
どうやら大事なのは語学クラスで孤立しないことらしい。
こっちではどれだけ孤立しようと誰も気にしてなんかいないし、そもそも一人一人の行動が全く目立たない。
これらを踏まえてひとつだけ答えを導き出すことに成功した。
どうしようもないっす。
一番大事なところを落としてしまったわけだ。これじゃあもう友達を作る手段は皆無。状況を打開する方法は残されていない。
夢見光に頭を下げて友達になってもらうしかないのか。
2限目の授業も終わり、登校初日からテンションが下がりに下が

ってしまった。
そんな俺に希望の光が差し込んだ瞬間だった。
「新入生募集……」
そうか、すっかり忘れていた。サークルがあるではないか！　この時期の新入生がどのような価値があるのか、入学前に必死に調べてるから知ってるぞ。
希望の光、廊下に張ってあるサークル勧誘のビラを俺は人目を気にすることなく必死に吟味した。
どうやら新入生勧誘期間というものがあるらしい。その期間は今日から1週間。
その期間は、サークルが自由にビラを貼ったり、学内で少々荒い勧誘も黙認されているとか。
このチャンスを逃す俺ではない。スタートダッシュは儚い結果に終わってしまったが、本番はここからである。
よし！　目当てのサークルを探すぞ！
とは言ったものの、中学高校時代、一切の部活を避けて通ってきた俺に、リア充っぽさ満点のサークルを選ぶことはできない。
なんとか、二次元系サークルやあからさまな文系サークルを除き、自分の居場所として適切なサークルを選び出さなければいけない。
そう考えるとなかなか骨の折れる作業ではある。
やはりそういう探し方をしていると、本当の意味で意味不明なサークルが多いことに気付く。
指名手配犯を見つけるサークル、混浴で合法的に覗きを行うサークル、川に飛び込むサークル。
頭おかしいだろ。
大学ってこんなのも黙認されてんのか？　さすが、高校とはわけが違うな。
だがしかし、そんな意味不明な羅列の中で、ひとつだけ目を引いたサークルがあった。
ビラにはこう書かれている。

叫部。
なんだ叫部って。読み方は、さけぶ、でいいのだろうか。
しかも説明がこれだ。
特になし！　わかるやつにはわかる！
いや、わかんねーよ。と言うしかない。
だが俺の目を引いたのはそこではない。重要なのはその下に印刷されている集合写真だ。　中の上くらいの男子たちと、上の下くらいの女子たち。人数は１０対１０くらいで上手く構成されている。
ちなみに、中の上やら上の下ってのはもちろん顔面偏差値のことだ。
これを俺は素早く分析する。右脳が物凄い回転率で稼動する。
つまりだ、上の下くらいの女子なら全く狙えないわけでもないギリギリのライン。そこで周りは中の上の男子たち、つまり、男子は女子より劣っているが、劣り過ぎているわけでもなく、合コンに連れて行っても支障のないレベル。
完璧だ。
サークルの活動内容なんてどうでもいい。
叫部が俺を呼んでいる。
そう決め込んだ俺は、ビラに書いてあった新入生歓迎の花見が行われる日程に今日が含まれていることを確認し、再び頬を2発殴って気合いを入れた。

ビラに書いてあったアドレスに花見に参加したい旨を送ったところ、当日参加でも全然おっけー、とのことだった。
とうとう俺も大学生の流れに乗ってきたぜ、と気合十分で訪れた花見の場所は、大学から少し離れた場所にある大きな公園。季節の流れに便乗して、桜が綺麗に咲き誇っている。
空は若干暗くなりかけているが、公園内に設置されているスポットライトのおかげで、公園内は明るく、カップル達のデートにこれ

ほど最適な場所はないだろう……、と思ったら大間違い。
うるせえええ。
せっかくのお洒落な蛍光も台無し、酔っ払った大学生とスーツ姿のサラリーマンで公園内は埋め尽くされ、カップルがいちゃいちゃできるような場所なんてどこにもない。
俺がもし彼女とデート中だったらキレているところだ。まあ彼女なんてできたこともないが……。
と、意味のない自虐ネタなんかを考えている間に、叫部が花見を行っている場所を発見した。
叫部！　と派手に書かれた看板。
間違いない、あれが叫部だ。
まさかこんな、どんちゃん騒ぎの一角を陣取っているとは思いもしなかった。
もっと隅の方でやればのんびりできるだろうに。
いやしかし、これで残念な人達が集まった陰気なサークル、という線は消えた。まあそれはビラに張ってあった集合写真を見れば一目瞭然だったわけだが。
さて、ここからが本当の勝負だ。気取っている風でもなく、挙動不審にならない程度に、落ち着いて、呼吸を整えて、いざ出陣！
「あのー、今日メールした者なんですけど」
低姿勢で輪の中に入っていく。
すると、その場にいた数人が俺の声に気付き、こちらを見る。
「お、今日メールくれた子だな！　さあ座って座って！」
少し怖そうだが、美人系の年上っぽい女性にブルーシートに招かれる。
やばいぞ。見た感じルックスのレベルが高い。
よし、ここからは会話に上手く溶け込めるかどうかが重要ポイントだ。まずは軽く、当たり障りのない内容で攻めよう。
「ありがとうございます。えーと、どこまでが叫部の敷地なんですか？」

「ん？　このブルーシートにいる４人だけだぞ？　新入生は君合わせて2人。1人はトイレに行ってる」
と、キリっとした表情でここを仕切っているらしいお姉さんが紹介してくれる。
なるほど。
と思って、しばらく考えた後の俺の反応はこれ。
「えっ？」
「どうした？」
少しニヤりと笑うその人の表情に俺は軽く悶絶してしまう。
「いや！　だってビラでは集合写真で軽く２０人くらいいたじゃないですか！　偶然日程が合わなくて４人しか来れなかったとでも言うんですか！」
「よーよー落ち着きたまえよ新入生。ビラは釣りに決まってんだろ。俺達だって人数稼ぎたいんだよ」
と、缶ビール片手にイケメン男が発言する。なにチャラい顔でかっこ悪いこと言ってんだよこの人……。
え、てかマジで？
俺、目つけたサークルミスっちゃった？
まさかそんな、そんなはずはない。
最終手段のサークルでさえ、俺は神に見放されたっていうのか？
くそ……納得できん。納得できんぞこの状況。
「おい、大丈夫か新入生？　酒でも飲むか？　あーでもまだ酒は飲めないか。ソフトドリンクは少しだが一応あるぞ。あとはまあ、アルコール度数低めのチューハイもあるし……」
「あ、ビールか発泡酒ってあります？」
「酒には貪欲なのかよ！」
その場にいる全員から突っ込みを食らった。
「いやーだって、もうこの際飲むしかないなーと思って。だって釣りなんですよね？　だったらタダ飲みする為にとことん居座ってやりますよ。言っときますけど、遠慮しませんよ」　叫部の先輩たち

４人の様子がおかしい。やはり、急に態度を大きくし過ぎただろうか。だがしかし、間違ったことは言ってないつもりだ。インチキサークルだったのならば、それを大いに利用し尽くしてやろうではないか。

ていうかもう、ストレス溜まり過ぎて、酒という言葉を聞いて安心してしまった。今の自分ならなんでもできる気がする。どんな障害にも打ち勝てる気がする。なんなんだこの自信は、わけわかんねーぜ！

「よーしいいぞ新入生！　ほれ！　ビールだ！」

プシュっといい音を鳴らして缶ビールが俺の手に渡される。そう、この感覚。俺が求めていたのは他の何でもない、暴れられる環境なのだ。

本当の自分が出せる。

そんな場所を俺は求めていた。

「先輩。缶ビールってあと何本あります？」

「おう、１０本は軽く余ってるぜ。気負いせずガンガン飲んじゃってくれ！」

「了解っす！」

俺の中のフィルターが外れた。どんどんどんどん、アルコールが体内を駆け巡って行く。　水やジュースでは味わえない、この喉越し！

生きてて良かったとさえ思ってしまう、痛快な味わい！

これはもう、誰にも何にも、俺を邪魔することはできないだろう。

「ただいまでーす！」

どこからか聞き覚えのあるようなないような声が聞こえてきた。

だが今の俺には関係ない。俺にはこのビールさえあれば――

「あ、光ちゃーんおかえりー。トイレ混んでた？」

ビールを噴き出した。

「おーおー勢い良く飲みすぎたか？」

女の先輩が優しくも鋭い声でこちらを気遣ってくれる。だがそん

なことはどうでもいい。　なんでまたあいつが登場するんだ！
　呪われてんのか俺？
「え、マジで……」
「どうした光？　あ、紹介しとこう。彼は今日メールをくれて急遽花見に参加することになった、えーと、たしか名前は……そう、澤崎だ」
　いきなり呼び捨てですか。女の人なのに気が強いなこの人。もしかしてこの人が部長なんだろうか。
　いや、そんなことはもはやどうでもいい。夢見光に対する策を講じなければ……。
「この人ストーカーなんですよ先輩。一緒のアパートに住んでるってだけで付きまとってくるんです」
「おい！　誤解を招くようなこと言ってんじゃねー！　ここに来たのは偶然だ！　お前をつけて来たわけじゃねーよ！」
「ほう……お前たち知り合いだったのか。これも何かの縁だろう。よし、みんな酒を持て！」
　部長っぽいその人に合わせ、叫部の先輩たち４人は一斉に酒を手にした。何かが起こるのだろうか、妙に怖い。
　そしてなんだろうこの連携。これが少人数サークルの絆というやつなのだろうか。
　そして、先輩たちは大きな声で乾杯を合図した。まさに、叫んでいるかの如く――
「ようこそ！　叫部へ！」

　とまあこんな具合に、叫部の花見があらためて始まった。
　もうなんというか、夢見光の存在で少し憤りを感じてはいるが、それでも酒が飲める楽しい場所、という前提に狂いはない。今はあんなやつのことなんか忘れて、とことん飲んでやる。そういう姿勢だ。

「よーし、じゃあこの辺で自己紹介といこうか」
おー、という歓声が上がる。俺含めて6人しかいないというのに、随分な盛り上がりだった。
「まずはこの私から。3年の霧間だ。一応部長をやらせてもらってる。よろしく新入生！」
やっぱりこの人が部長だったか。いやしかし、まさにできる女って感じだ。少々怖そうではあるが、嫌いなタイプではない。
「先輩！　下の名前は！」
2年生だろうか、同じく女の先輩が部長を煽る。
「そこは黙ってろ！　知りたければ名簿でもなんでも探ってくれ」
「ははは―！　ごめんなさいってミミ先輩！　あ、私は2年生の三木林　里。光ちゃんとは高校の部活で先輩後輩の仲だったの。それで今日呼んでみたわけ！　光ちゃんもちろん叫部に入ってくれるわよね？」
「考えときまーす」
光のそっけない反応にも笑顔で対応。三木林先輩か、この人はなかなか女子力が高そうだな。メモメモ。
てか、夢見光とは旧知の仲かよ。どうりで夢見光のやつ、最初から叫部に馴染んでたわけだ。
そうなるとやり辛いな。新参者は俺だけじゃないか。
「さてさて、そして俺が3年の西条　浩一。生涯抱いた女は数百人。付き合った女は3人だ。よろしく！」
なんだこのチャラ男は。初対面でヤリ捨てしまくってるアピールされちゃったよ。
しかし腹の立つことに、チャラいのには間違いないのだが、それでいて悪い人には見えない。なんでこうもイケメンってのは恵まれてるんだ。神に才能の再分配を望みたい。
「はいはい、ここで登場！　最強イケメン軍団の軍団長、小沼　朗次！ちなみに5年生。単位がとれていないわけではない！　就職留年だ！」

たった数秒の自己紹介でこれほどにまで人の性質が伝わってくることがあるだろうか。この人とは仲良くなれそうだ。5年生らしいけど。

「よーし、じゃあ次は新入生諸君、よろしく頼むぞ」

霧間先輩にそう言われ夢見光のほうをちらっと見るが、どうも俺を無視することに決め込んでいるらしく、さっさと自己紹介を始めてしまった。

「はい、この度晴れて大学1年生となりました、夢見光です！　好きなものはスイーツで、嫌いなものは童貞です！」

「おお、さり気なく残酷なこと言ってくれるねー。ちなみにこの部活に童貞はいないから安心してくれ！」

西条先輩の痛烈な一言が俺の心臓にぐさりと突き刺さる。

まじっすか。西条先輩はわかりますけども、小沼先輩も卒業済みなんすか。

なんで大学は卒業できないのにそっちは卒業できるんすかあああ！

「よーし、次はいよいよ澤崎の番だ。おもしろい自己紹介頼むぞ」

んなこと言われてもなー。勝手に傷心モード入っちゃってるんですよこっちは。

まあしょうがない。ここで変にかっこつけても仕方ないな。

いつものように、俺は頬を2発ぶん殴り、円になって座っている叫部一同に向かって立ちはだかる。

お、なんだなんだ。と、どよめきの声が上がるが、今の俺には何も聞こえないも同然だ。「ただいま紹介に預かりました！　澤崎玖炉と申します！　えー特技は暴走！　好きなものは酒！　嫌いなものは童貞を嫌う女子です！　ええどうせ童貞ですよ！　だからなんだってんだよ！　モテないからなんだってんだ！　モテないは個性だ！　彼女いるやつが偉いなんて風潮はマジでいらん！　モテる男はみんな爆発しろおおお！」

これが俺だ！　他言無用！　言えることは全部言ってやったぜこんちくしょう！

俺にはこれがある！　酒の力さえあればなんでも言えてしまうこの能力があるのだ。モテないからってなんだ。モテない男だってモテたくないからモテてないわけじゃないんだってんだよ。
そんなことを思っていると、場が凍り付いているのが伝わってきた。一瞬素面に戻ってしまう。
いかん、自我を保つんだ。俺は何ひとつ間違ったことは言っていない。
「じゃあさ澤崎。西条は爆発したほうがいいのか？」
霧間先輩からのお優しい一言。
「そっかー俺爆発すべき人間なのか。よし、ちょっと誰か火薬積んでくれ」
そこで俺はすかさず、ビールを片手に土下座を披露した。
慣れていない状況というのは怖いもので、仲のいいイケメンの友達はいたが、初対面でイケメンと接するなんてことはもう数えるくらいにしか経験していない。なんせイケメンとはなるべく関わらないようにしてきたのだから。そこは理解してほしい。
というわけでこれは事故。事故であって故意ではない。
そんなよくわからない弁解を流暢に、加えて卑屈に話した。
「まあまあ気にすんなよ。澤崎の暴走面白かったぜ。飲めるやつは嫌いじゃない！」
さすがイケメン。言うことがもう全然違う。
「どころで澤崎くん！　別にモテるモテないの話題はなかったのになんで急に暴露大会みたいにモテないことを話し始めた？」
見た感じでは俺よりモテなさそうだが、童貞でないことを知った今では上位の存在にしか見えない小沼先輩が言った。
「いやー正直言いますとね。トラウマなんですよトラウマ。特に酒が入っちゃうとどうしてもモテないトークに自ら進んでしまうっていう……。情けない話っすよね」
「しかもさー。あたしをストーカーする前までは隣人のＯＬのストーカーやってたんですよ。もうこれだからモテない男って見境なく

て気持ち悪い」
「お前は黙ってろ！　お前だってモテない宣言を自分でしてたじゃねーかよ！」
「してないわよ！　てゆーか、モテない男とモテない女は価値が違うのよ価値が！　あたしは敢えて自分の価値を温存してるのよ！　わかる？」
「全然言ってることわかんねーよ。たしかに男のほうがモテないと馬鹿にされる傾向があるけどそれは女を気遣ってのことだ！　男が優しいだけなんだよ！」
とまあフェミニストみたいな口論になってしまった。しかし俺の体内にはすでに計り知れないほどのアルコールが注入されている。あと数分あれば論破できること間違いなしだ。
そこから俺は着ていた上着を脱ぎ、Tシャツ一枚になって、酒を片手に、ほとんど叫んでいる状態で持論を語り続けていた。
言葉を発した直後、その言葉は流れるように記憶から抹消されていく。だから恥ずかしくともなんともない、周りの目も全く気にならない。
完全なハイ状態だった。
そんなハイ状態の中、体力もだいぶ磨り減ってきたところで一時中断。アルコール度数の低い梅酒に切り替え、とりあえず腰を下ろしてみると、叫部の雰囲気に変化が起きていることに気付いた。
「どうしたんすか先輩たち」
とりあえず聞いてみる。頭が回らないのでそれくらいしか思いつかなかったのだ。
「澤崎玖炉……」
「なんでいきなりフルネームなんすか部長……」
なんだか怖いことを言われそうで怖い。この状況を素面状態の俺が直面していたら恐らく不安のあまり失禁するか泡を吹くくらいのことはしていただろう。
それほど俺は臆病なのだ。

「お前は――モテないこともなさそうだぞ」
「え？」
思わずポカンとしてしまう。この人、今なんて言った？　モテないこともないだと？
彼女がいたことすらないこの俺に対し、モテないこともないと言ったか？
どういうことなんだそれは。詳しく聞かねばならぬ。酔ってるとか言ってる場合じゃない。
「だよな、俺も思ったよ。澤崎お前モテるぞたぶん」
イケメン代表である西条先輩も深深と呟く。
一体どうしたと言うのだ。
まさか、俺にもモテ期というやつが到来したとでも言うのか。モテ期って彼女ができたり、告白されたりして到来するもんじゃないのか。なんだこの異質なモテ期は。
「ちょっとちょっと！　先輩たちどうしちゃったんですか！　こんなストーカー気質の男がモテるなんて戯言抜かすなんて！　先輩たちらしくないですよ！」
お前はちょっと黙ってろ！　俺は栄えある先輩たちの忌憚の無い意見が聞きたいんだよ。「夢見光。お前が一番良くわかってると思ったんだけどなー。わからないか？　酒を飲む以前の澤崎と飲んだ後の澤崎。全然違うだろう」
「それは、ただ酔っ払ってるだけじゃないですか！」
「言ってしまえばそうだ。だけどな、初対面の人がこんなにいる中で、ちょっと酒を飲んだくらいで変われる人間はそういないぞ」
「それはまあたしかにそうですけど……言いたいこと言ってるだけじゃないですかこのストーカーは」
もう完全にストーカーと呼ばれている。まあそれはいいとして、霧間先輩の言う通り、たしかに俺は酒を飲むと初対面だろうが誰だろうが構わず言いたいことが言えてしまうのだ。これは自分の長所でもあり、場合によっては短所でもあるとは思っていたのだが、そ

れがモテることにどう繋がるというのだろうか。全くわからん。
「だからな。そこがモテる起因になるんだよ」
「そこが……？　空気読めないことがモテ要素になるって言うんですか？」
「光ちゃん！　ミミ先輩の言ってることわからない？　誰に対しても心から思っていることをなんでも言える！　そういう澤崎くんならモテるって言ってるんだよ」
「ちょっと待ってください！　酔っ払ったバージョンの俺ってモテ要素あるんですか！　そういうことなんですか！」
「落ち着きな澤崎。焦る必要はない。たしかに酔っ払って言いたいこと言うだけじゃモテるわけがない。そっから先は素面のとき考えてみろ」
なるほど。霧間先輩、説得力が半端じゃないぞ……。
たしかに、熱血系の男子はモテると良く聞くしな。しかし、酒の力が俺にこうもプラス要素を与えてくれるとは思っていなかった。
てことはつまり、大学生といえば酒、酒といえばモテる。
俺はこれからモテることが可能だということだ！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0456z/

新作（タイトル未定）

2011年12月1日20時46分発行